

20 mm longi glabri viridescentes vulgo e basi atropurpureo-rubescentes apice petioli glandulis vulgo 2- interdum 3 atropurpureo-rubescensibus vel atrorubescensibus instructi. Drupa fere globosa circiter 10 mm in diametro primo rubra demum pernigra lucidissima. Putamen turgide lentiforme 7 mm longum 5.7 mm latum fuscescens-albidum.

Nom. Jap. Takane-ohyamazakura nom. nov.

Hab. cult. in Hort. Bot. Nikko. Univ. Tokyo. (T. Kawasaki, Apr. 26, 1958—typus florum in Herb. Nat. Sci. Mus. Tokyo.; Jun. 8, 1958—typus fructuum in eodem museo).

オオヤマザクラとタカネザクラ系のものとの雑種と考えられる。東京大学の日光植物園内に栽培されていたのを発見した。同園が開設される前から野生していたものか、あるいは後にどこからか移植されたものか不明である。樹は喬木となりちょっと見た所ではオオヤマザクラとまちがいやすい。花はオオヤマザクラに非常に近く、花弁の色や花序の状態などはオオヤマザクラとほとんど同じで苞鱗は粘性を有する。ただ全体に大きさがずっと小さい。小花梗には時にごくわずかに毛が出るが、オオヤマザクラにも毛の出るものがあるしタカネザクラにも毛の無い場合があるから、この形質がどちらの方から導入されたものかわからない。若い出たばかりの葉はよく開いており、鋸歯の状態、鋸歯先端の腺の形状、葉脈が裏面に突出して反対に脈と脈との間の部分が表面の方にふくれて出ており平坦でない点、また全体の光沢などはタカネザクラにきわめて近い。若葉はいくらか粘る。成長した葉では、葉底が心臓形となる点はオオヤマザクラに似ているが、全体の形が非常にまるっこくなる点はどちらにも似ていない。裏面はオオヤマザクラのように蒼白色とならず淡緑色なので明らかに区別できる。果実の形はほぼ球形でタカネザクラに近く、大きさは両者の中間である。

学名は日光植物園でサクラを研究しておられる久保田秀夫氏を記念したものである。なお標本の材料を得るためにいろいろと御便宜を図つてくださりまた御指導くださった日光植物園主任の中村七郎先生と前記の久保田氏に深く感謝の意を表わす次第である。

---

○鳥取砂丘（生駒義博編、毎日新聞社発行、220 頁、240 円、1958 年 10 月）15 人の執筆者であらゆる角度から鳥取砂丘を手がけたものであるが、生駒氏が砂丘植物の生態と分布、鳥取大学の原教授が砂丘造林、遠山教授が砂丘の特産作物について記し、日本で唯一の鳥取大農学部付属の砂丘研究実験所の紹介もある。現地でじっくり砂丘に取組んだ方々の執筆だけに大いに得るところがある。（佐藤正己）